2022 年 12 月記載

教えて！！漢方＆鍼灸

附属東洋医学研究所
助教　陣内厚子

教えて！！漢方＆鍼灸

『保険診療の漢方薬、市販の漢方薬、自費診療の漢方薬、何が違うの？』後編

前回は自費生薬やOTCについてのお話をしました。今回は、当院のような保険診療の漢方治療についてお話ししたいと思います。

◆保険診療の漢方薬（病院から処方箋がでる漢方薬）とは？

これまでのお話で十分ご理解いただけたと思いますが、保険診療の漢方薬とは、医療用医薬品の中に分類される漢方薬のことで、保険診療の対象なので患者さんは比較的費用の負担が少なく投薬を受けることができます。

さらに当施設では、煎じ薬（生薬そのものを湯で煎じて飲む薬）も保険診療でできる限りの種類を投薬できますので、保険で扱えない漢方エキス処方を用いたい時も、生薬の量や種類を微調整することができます。

「保険診療」というと、実は漢方専門の外来でなくても漢方薬を処方されることは多くあります。漢方専門ではない医師でも、漢方に詳しく、良い処方が受けられることもありますが、そういった場合の漢方治療は各専門科（耳鼻科や婦人科、皮膚科…など）領域ごとに処方されるため、処方の量が多くなりやすく、かえって患者さんの負担になることもあります。「漢方治療で体調をよくしたい」「体質改善をしたい」といったご希望の場合は、全体のバランスを調えるような治療が望ましいので、ぜひ当施設のような漢方専門外来へいらしていただけたらと思います。

漢方治療において注意しなければならない副作用が近年少しずつ分かってきており、とくに長期の投薬においては気を付けることが多いです。漢方薬が現在のように エキス処方として売り出されていなかった時代は、生薬を煎じたり（煎じ薬）、手間が毎日かかっていましたし、「医療用医薬品」に漢方薬が認められる前は現在のような安価な値段で手にすることができませんでしたので、漢方治療を長期的に続けることはあまりなかったと思います。その分、漢方理論を基とした養生に励むことで健康維持を目指していたことでしょう。手軽に薬による治療が行えるようになった現代でも疎かにしてはいけないことだと感じています。

漢方薬も立派な薬ですので、適時・適量を心がけないと副作用や誤治を起こしかねません。江戸時代の名医である後藤艮山は、薬による治療だけではなく食事療法や運動療法が大事と推奨し、病気になる前の「未病」の段階での養生が大事であると記しています。

当院では「少なくともお引き受けした時より悪化させない」「西洋も東洋もなく、患者さんのためにできるだけのことを」という理念のもと、治療における副作用に常に注意を払いながら、過重な投薬治療は勧めず、養生指導も行ったうえで必要な漢方薬による治療を心がけております。また、患者さんの病態に合わせて必要な西洋医学的検査も兼ねて診療を行うようにしていますので、漢方専門の外来施設ではありますが、現代治療も併用したり別の西洋医学的な専門科と一緒に治療を進めていくこともあります。「未病を治す」ための手助けが必要な患者さんに、適切な指導ができるように努めていきたいと思います。

前編・後編と合わせて日本で行える漢方治療についてのお話をしました。現代は西洋医学的な治療のみならず漢方・鍼灸治療もそれぞれ希望によって受けることができる便利な時代となりました。ご自身の健康について悩むことがあればぜひご相談いただけたらと思います。

次回は、～養生訓から学ぶ Part2～です。